

主 文  
原判決を破棄する。  
被告人は無罪。

理 由

本件控訴の趣旨は末尾に添付した弁護人深田鎮男、同有賀岩己名義の控訴趣意書並びに弁護人深田鎮男名義の控訴趣意書訂正申立書記載のとおりで、これに対し当裁判所は次のように判断する。

控訴趣意書論旨一、について。

原判決は「被告人は法定の除外事由がないのに、昭和二十六年十月十二日千葉県印旛郡 a 村 b 地先 c から同郡 d 村 e 地先まで、粳玄米十俵三斗を農船に積み輸送したもの」と認定し、これに食糧管理法第九条、第三十一条、同法施行令第十一条、同法施行規則第四十七条を適用処断したのである。しかし食糧管理法第九条やその他同条施行のための前記法令はいうまでもなく主要食糧の公正な配給を確保するたために設けられた〈要旨〉なのである。従つて主要食糧の生産者がその生産したものを収穫するに当つて、たとえば遠隔地に耕地があるよう〈要旨〉な場合収穫物を自家に収納するためには必然的に主要食糧を甲地から乙地に移動させる必要が生じるわけであるが、その行為は主要食糧の公正な配給を確保するという食糧管理法の目的を阻害する虞は少しもないのであるから、それは同法にいう主要食糧の移動又は輸送というのに該当しないのである。生産者がその生産した主要食糧を自家の食糧に充てるため精米所に持つて行くのも又同様といわなければならない。もしそうでないとすると、食糧管理法施行規則第四十七条にいわゆる法定の除外事由としてこれらを行つてを必ずしも明らかに掲げていないのであるから何人といえども輸送してはならない結果として、生産者たる農家自身が生産に当然附随する行為を禁ぜられるといふ矛盾を生ずることを免れないし、その矛盾を除こうとして、官庁の許可等により禁止が解除せられると解すると、生産者に対し煩わしい手続を課することと自らがその生産に支障を来すこととなり延いては法の企図する公正な配給を確保することに悪影響を及ぼすことなきを保証できないからである。これを本件についてみると、被告人は昭和二十五年から隣村印旛郡 a 村 b 地先の c 沿いにある約二反歩の荒地を A から借りて開墾し、水田としたが同年は水害のため収穫皆無に帰し昭和二十六年に初めて十俵余りの収穫を挙げられたのであるが、そこで同年八月末頃刈り入れを終え、同年九月十日頃現地で脱穀し A 方庭先で調整した上、その十俵と三斗の玄米を暫く A 方に預けておき、同年十月十二日農船を借りこの玄米を積み込み、印旛郡 d 村 e の B 方で精米して貰うため B 方に近い地点まで船で約五斗を運んだのであるが、同郡 f 町の被告人の家から a 村 b 地先まで陸路約七斗あるし、右玄米を被告人方に運んだ後時間をおいて B 方に運ぶとすると更に二、六斗も運ばなければならないような地理的關係があるので、被告人がしたように水路を利用した方が距離も近く米俵のような重量のあるものを一時に運搬するには遙かに便利なこと原審証人 A、同 C の証言に原審検証の結果により明らかであるし、更に原審証人 D、同 E の証言によれば、被告人は従来からも屢々精米のため B 方工場を利用しており本件の十俵三斗の玄米を全部 B 方に運ぼうとしたのはこれを一時に精白して貰うわけではなく、必要に応じ随時精白して貰うため一応全部を B 方に預けておくためのものと認められるのである。してみると被告人の所為は主要食糧の闇行為を伴う輸送とはその類を異にしているものといふべきであり、それ故主要食糧の公正な配給を確保するための食糧管理法の目的を毫も阻害することがないから、同法にいわゆる主要食糧の移動や輸送というのに該当しないものといわなければならない。然るに原審は本件の玄米が被告人の生産米で生産地から c を利用して運んだ事実を肯認しながら、それだからといつて直ちに違法性がないと解するのは相当でないとし更にこれにつけ加えて被告人が本件以外にも数回米を運んだ事実があることを認めこの事実を徴すれば被告人の所為が違法性がないとはいえない旨説明しているのである。しかし被告人が他に数回米を運んだ事実の如きは、それによつて本件の所為を違法ならしめるものとは認められないから原審の右説示は食糧管理法並びにその施行法令の解釈を誤つており、この違法は判決に影響を及ぼすこと明らかであるから、論旨はその理由があり、他の論旨についての判断を俟たずに原判決は破棄を免れない。

よつて本件控訴は理由があるから刑事訴訟法第三百九十七条により原判決を破棄し、同法第四百条但書に則つて当裁判所が直ちに判決することとする。

本件公訴事実は被告人が法定の除外事由なくして昭和二十六年十月十二日印旛郡 a 村 b 地先から同郡 d 村 e 地先まで粳玄米十俵三斗を農船に積み込み輸送したもの

と謂うのであるが、右玄米は被告人が農耕に従事して得た収穫であり、これを生産地たる a 村から、被告人自宅に収納するに当り、平素から精米を依頼していた仲である同郡 d 村 e の B 方に運び必要量を随時精白して貰いその他は同家に預けておくため収穫米十俵三斗を農船に積み込み d 村 e まで運んだものであるから、食糧管理法の建前を阻害する理由は認められないから右所為は同法にいう輸送行為に該当しないものと解するのが相当である。それ故被告人の所為は罪とならないから刑事訴訟法第三百三十六條に則つて無罪の言渡をなすべきである。

よつて主文のとおり判決する。

(裁判長判事 近藤隆蔵 判事 吉田作穂 判事 山岸薫一)